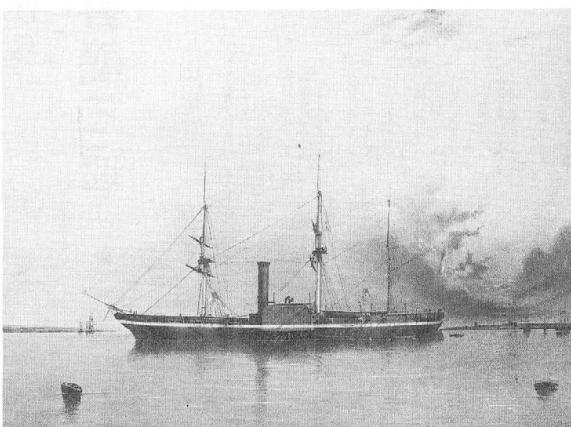


ペリーの星条旗（複製）



ポーハタン号 ペリー艦隊再来時(1854年)の旗艦。

C.B.Stuart, *The Naval and Mail Steamers of the United States* (New York, 1853)

それから一三年、当初一〇万点程でスタートした収蔵資料も現在は一六万点を越え、企画展示の開催回数も五〇回に達した。今年の秋には入館者数の累計が一〇〇万人を突破することが見込まれている。新収資料は整理のうえ閲覧に供するとともに、企画展示に出品することによって公開に努めているが、展示スペースが狭いこともあり、日々の目を見る機会に恵まれないものも多い。そのため、一九八三年には「資料による横浜の歴

開港ひろば

YOKOHAMA ARCHIVES
OF HISTORY NEWS

編集・発行／横浜開港資料館（財横浜開港資料普及協会）
横浜市中区日本大通3番地 〒231 電話(045)201-2100
発行日／平成6年5月11日
印 刷／株式会社 佐藤印刷所

日本開国一四〇年・ペリー生誕二〇〇〇年

館蔵資料展「横浜の近代」に寄せて

今から一四〇年前の嘉永七年三月三日（一八五四年三月三一日）、当館中庭に繁る玉楠の木の近くに設けられた応接所で、開国を求めて来日したアメリカ遠征隊の司令官ペリー提督と日本側全権との間で日米和親条約が締結され、二百数十年にわたる鎖国に終止符が打たれた。（ペリー一行渡来時の玉楠の木は、開国史跡の標識として知られていたが、関東大震災で

消失。現在の木は生き残った根から再生した二代目。一九八八年横浜市地域文化財に指定された。ペリー提督は一七九四年四月一〇日、ロードアイランド州ニューポートの生まれ、今年は生誕二〇〇年に当たる。

近代日本の夜明けを告げる開国記念の地に設立された当館では、一九八一年六月に開館記念「ペリー提督」展を開催した。これにはアメリカ海軍兵学校博物館に保存されるペリー携行の星条旗（國版参照）をはじめ、国内外の資料が一堂に集められ、展覧に供された。

冒頭でも触れたように、今年は開国一四〇年・ペリー生誕二〇〇年に当たることから、第一展示室（常設）に特別コーナーを設け、これまでに当館が収集した黒船絵巻九本を一挙に公開するほか、アメリカ海軍兵学校博物館の許可を得て、「ペリーの星条旗」の複製を作成して展示する。ウール地に当時の合衆国を構成する三一州の数の星が縫いつけられている。これは太平洋戦争終結時に、「第二の開国」を寓意すべくマッカーサー元帥が持参し、ミズーリ号上で降伏調印式場に掲げたという因縁のあるもので、開国記念地に立地する当館はもとより、「第三の開国」に譬えられる国際化時代をリードしようとする横浜市にとつても、シンボル的存在になるものと思う。

「館蔵資料」展 出陳資料から

生糸仕切書と書簡三通

石川屋の生糸仕切書

次に紹介する史料は、貿易商石川屋の「生糸仕切書」である。「生糸仕切書」というのは、生糸を輸出するのに際して貿易商が作成した決算報告書のことである。この史料から生糸貿易の様子を具体的に知ることができる。

たとえば、ここに掲げた「生糸仕切書」によれば、石川屋は、安政六年(一八五九)十二月八日に近江屋という商人から預かった大量の生糸を外国商館に売り込み、一ドル以上のメキシコドル(当時の貿易通貨)を獲得している。また、石川屋は、この取引から五百ドル近い売り込み手数料を受け取っている。

仕切書を書いた石川屋は、開港直後に横浜に進出した生糸貿易商で、数多い貿易商の中でも一頭地を抜いた商人と伝えられる店である。また、この店は越前の福井藩が横浜に出了した店で福井藩の産物を中心全国各地の生糸を集荷した店でもあった。しかし、こうした著名な貿易商であっても、関係史料はほとんど残っていない。

このことは、石川屋以外の貿易商についても同様で、開港直後に横浜に進出した商人については不明な部分が極めて多い。これは生糸貿易商の盛衰の



石川屋の生糸仕切書

生糸貿易商石川屋与助が荷主の近江屋伊七にあてたもの。生糸貿易商は外国商館と荷主との間を仲介し、手数料を徴収した。開港直後の生糸貿易商の栄華を現在に伝える珍しい史料である。

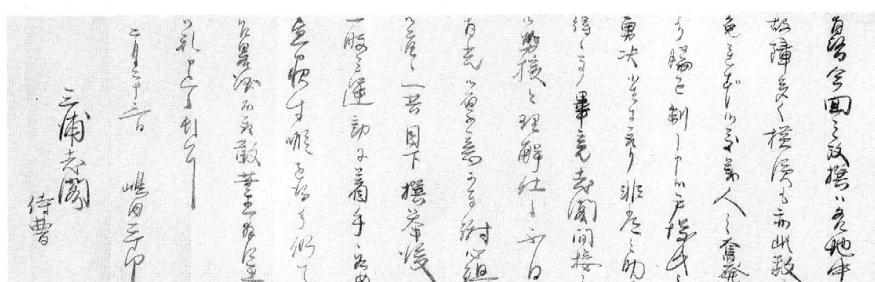
島田三郎の書簡

明治二十五年第二回総選挙直後の当選礼状である。まず全文を紹介しよう。

拝啓 今回之改選ハ各地中々故障多く横浜も亦此数を免れず候處、義人之奮發により勝を制し申候、戸塚氏之勇決小生に取り非常之助を得候事畢竟老闘間接之御勢援と理解仕候、不日拝光御厚意可奉謝心組ニ御座候、
ヘ共、目下撰挙後一般之運動に着手候為め昼夜寸暇を得ず、仍て乍略儀不取敢筆書拝呈、御礼申上候 頤首
二月二十三日 島田三郎

三浦老闘
侍曹

島田は幕臣鈴木氏に生れ、のち横浜の島田豊寛の養子となる。帝国議会開設と同時に神奈川一区(横浜市)から立候補、衆院議員に連続當選、政界净化、廢娼・普選問題等に取組んだ。三浦は、貴族院議員三浦安、硬骨な雄弁家で知られた。第二回総選挙は、品川内相の選挙干渉で各地に流血惨事をみ



島田三郎、三浦安あて書簡 明治25年2月23日

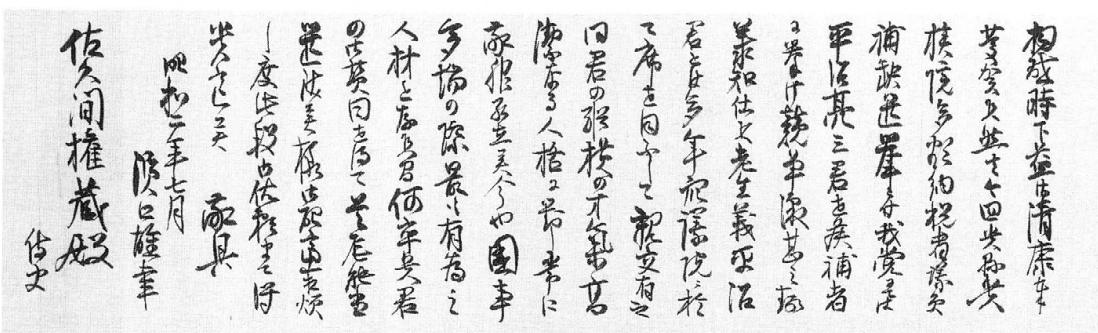
激しさに原因があり、安政六年に開業した生糸貿易商約百軒の内、明治十年代まで営業を続けたのはわずか数軒にすぎなかつた。また、関東大震災や戦災が関係史料の散逸を一層進め、現在では店の名前さえ忘れ去られた商人も珍しくない。しかし、彼らが生糸貿易の基礎を作り上げたことは間違いない。横浜開港資料館では関係史料の発掘と彼ら貿易商人の顕彰を地道に続けていきたいと思っている。(西川武臣)

田が朝田又七に圧勝した。文中「義人」は、奥田義人か。奥田は、鳥取出身、一七年東大法卒の官僚、當時農商務省特許局長、のち三六年第八回総選挙に伊藤博文らの後援で島田追落の対抗馬として登場する。二十五年当時、両者はどこでどう交錯していたのだろう。

浜口雄幸の書簡

次は、昭和二年七月、民政党総裁浜口雄幸から、横浜市鶴見町佐久間權藏あて書簡。来る一九日の神奈川県貴族院多額納税議員補欠選挙で、同党候補平沼亮三への投票依頼である。銀行破綻から引責辞任した民政党左右田喜一郎議員の補選であった。平沼は、大正四年衆院議員に初当選、同一一年から市会議長の要職にあった。先代九兵衛の昔、島田の紹介で立憲改進党に加盟した経歴がある。鶴見町は、この年四月市域に編入されたばかり。一月の市会選挙では、長男道夫が第二区一級選挙でトップ当選する。

この補選で、政友会は上郎清助を擁立。佐久間は、中立派の有権者に働きかけたが、既に内相や川崎市長からの工作があり、不首尾に終わった。六月一〇日の民政党県支部での候補者選定会、七月五日の決起集会に出席、投票日には七時半に出浜、横浜駅頭の選対事務所で有権者を出迎え、のち県会議事堂で五番目に投票を行った。開票結果は、上郎九一票に対し平沼六六票であった。平沼は補選出馬で衆院議員を辞任、この衆院補欠選挙が九月一二日に行われた。その結果、民政党三宅磐が政友会赤尾彦作を破つて初当選、前回の雪辱を果たした。



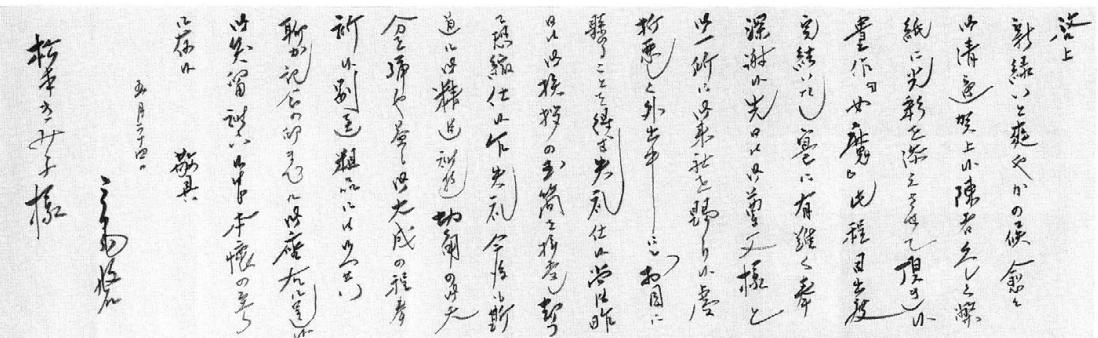
浜口雄幸、佐久間權藏あて書簡 昭和2年7月 佐久間亮一氏寄贈

三宅磐の書簡

最後は、昭和九年五月二十四日付、横浜貿易新報社長三宅磐から、鎌倉郡戸塚町松本喜美子あて手紙。三宅の自筆書簡は大変珍しく、戸塚区にご健在の松本さんからご寄贈いただいたものだ。

三宅は、大阪朝日・東京日日の各紙記者をへて、明治四一年平沼亮三や島田三郎らの要請で来浜、市政顧問に就任、翌々年横貿社長となる。書簡は、去る二日に連載小説「女魔」が無事完結した礼を述べ、今後の精進を期待し、記念の品を贈るというもの。「女魔」は、某女子大学英文科卒の同級生で、気質の対照的な二人の若い女性の同性愛をテーマにした小説。三月一三日から七〇回連載された。作者の松本さんは、三宅来浜の年のお生れ、東京女子高等師範学校を卒業、教職をへて結婚間もない、當時二五才の新人作家だった。在学中より少女・婦人雑誌に投稿し、当時は女流作家を志していたという。新聞連載は、松本さんが日頃書き溜めているのを知った義父の元八氏が、知人を通じて原稿を持込んだもので、担当記者・三宅社長の審査に合格して掲載された。三宅が贈った記念品は、市内某百貨店の商品券だったといふ。三宅は翌年逝去、松本さんはその後教壇に復帰、戦後の教育行政で活躍され、現在も折々に文章を物されてい

(佐藤 孝)



三宅磐、松本喜美子あて書簡 昭和9年5月24日 松本喜美子氏寄贈

平成6年5月11日(水)

横浜開港資料館館報

「上海と横浜—近代アジアの二つの開港都市」展 上海市で開幕

上海には一足早く春が訪れていた。柳が芽吹き、木蓮の花が満開に咲く中、三月二八日、上海市档案館において「上海と横浜—近代アジアの二つの開港都市（上海和横濱—近代亞洲兩個開放城市）」展が開幕した。

横浜開港資料館では昨年十月末から本年二月にかけて、横浜上海友好都市提携二十周年記念「横浜と上海—二つの開港都市の近代」展を開催し、多数の方々のご参観をえた。今回、装いも新たに、上海市、横浜市、上海市档案館、上海市歴史博物館、上海社会科学院歴史研究所、横浜開港資料館の主催で、上海での展示がオープンした。

上海市人民政府の方々と、朱慶祚上海市人民政府の方々と、朱慶祚上海市图书馆館長、黄宣佩上海博物館副館長、丁義忠上海博物館文化交流弁公室主任ら関係機関の方々が多数参加された。史梅定上海市档案館副館長の司会で式は進められ、謝麗娟副市長と物部匡当館長が祝辞を述べた。謝麗娟氏はスピーチの中で、「この展示会は両市の関係者が五ヶ年にわたって、計画・研究・協力し、豊富な文献資料と歴史写真を生かし、上海と横浜の一九二〇年代までの歩みを私たちに生き生きと伝えてくれる。上海市民はこの展示に多大な関心をよせ、横浜に対する理解」と友情が一層深められるでしょう」と述べられた。そして謝麗娟氏、張乾上海市档案館館長、物部匡当館館長によるテープカットが行なわれた。

展示は「開港」「上海租界と横浜居留地」「都市の発展」「都市基盤整備」「貿易」「産業の発展」「洋学の伝播と影響」「両市往来」「上海の日本人と横浜の中国人」「上海と横浜の社会風俗」「上海と横浜の風景」の十一の部分から構成され、約二五〇点の資料が展示された。展示内容は八割ほどが横浜で展示されたものと同じである。当館からは貞秀の「横浜交易西洋人荷物運送之図」、三代広重の「東京横浜蒸氣車鉄道之図」などの横浜絵、羅森の『続日本日記』、J. R. ブラックの『The Far East』などの書籍、ボール・ハイネマン商会の茶商標などの原資料二五点が出品された。また横浜の町の歩みや風俗の変化を示す資料として、着色写真、絵はがき、地図などの複製資料約一〇〇点が提供された。

ここで、横浜と上海での展示が無事開催されるまでの歩みを簡単にふりかえってみたい。

横浜開港資料館が上海市との学術交流を模索しはじめたのは、一九八七年のことである。その後関係者との協議を経て、一九八九年度より両市の友好交流項目の一つとして、都市形成史の比較研究が位置付けられた。同年一二月に上海市を訪問し、上海市档案館、上海社会科学院歴史研究所、上海図書館の担当者と共に会議を開き、五ヶ年の交流事業について協議した。この段階で上海図書館は直接交流事業には関与しないが、資料面での協力に参加することになった。そして交流事業の成果として、両市の友好都市提携二〇周年の一九九三年度に、展示の開催と論文集の刊行をめざすこととなつた。

その後、上海市での資料調査を進められた。展示内容は八割ほどが横浜で展示されたものと同じである。当館からは貞秀の「横浜交易西洋人荷物運送之図」、三代広重の「東京横浜蒸氣車鉄道之図」などの横浜絵、羅森の『続日本日記』、J. R. ブラックの『The Far East』などの書籍、ボール・ハイネマン商会の茶商標などの原資料二五点が出品された。また横浜の町の歩みや風俗の変化を示す資料として、着色写真、絵はがき、地図などの複製資料約一〇〇点が提供された。

八九年度より相互に代表団を派遣し、展示開催、論文集出版についての協議が続けられた。展示については、基本的には横浜と上海それぞれが独自に企画をしてくるが、互いに積極的に参考意見を述べるという方針が決まった。そして、相互訪問時の会議やファックス・書簡のやりとりを通して、コナーのたて方、個別資料の推薦などの作業が行なわれた。と同時に原資料・フィルムの貸出に関する様々な問題が話合われた。



開幕式で祝辞を述べる物部匡当館館長。
後列右から二人目謝麗娟副市長



展示会場風景

比較研究が位置付けられた。同年一二月に上海市を訪問し、上海市档案館、上海社会科学院歴史研究所、上海図書館

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

月

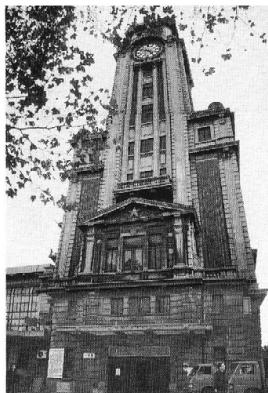
月

月

月

横浜・上海学術交流

上海図書館の資料



上海図書館

当館の海外資料調査の一環として上海での調査がはじめて行なわれてから七年近い歳月がたつ。この間、上海図書館は、学術交流五か年事業には直接参加はしなかつたものの、当初から資料調査・収集に協力してくださった。上海図書館は一九五二年の設立。上海隨一の繁華街南京路にある。建物はもと競馬場スタンドで、古籍閲覧室のバルコニーに立つと眼下に人民公園（もと競馬場）がひろがる。上海は今建築ラッシュで、上海図書館も日本総領事館の隣に新館を建設中とのことである。蔵書形成の過程をうかがうと、

①『セレスティアル・エンパイア』
The Celestial Empire 一八七四年七月四日創刊の英字週刊紙。中国名は「華洋通聞」または「東洋通聞」といふ。ちなみにセレスティアル・エンペイアとはチャイニーズ・エンパイア（中国帝国）の旧称。

初代編集長はF·H·バルフォア
Frederick Henry Balfour 『アイブニング・ガゼット』紙の海外版として、ヨーロッパ行き郵便船の郵便締切りにあわせて毎週発行された。日刊紙では紙幅の制限があって十分に伝えることができないニュースや情報を総合的にカバーするとうたつている（創刊号のみ）。

創刊号から同年一二月三一日まで（欠号あり）。

一八九〇年、『シャンハイ・マークユリー』が『アイブニング・ガゼット』等を合併し、日刊は『シャンハイ・マークユリー』の名を継続し、その海外版が『セレストリアル・エンパイア』と

当館では上海訪問のたびに事前に閲覧希望資料リストを出して協力を仰いだ。蔵書楼旧蔵の新聞や雑誌を中心に閲覧し、マイクロフィルムで収集した。このうち複製版で公開できるようになつたものを（一部公開準備中のものも含め）紹介する。いずれも日本の主要な機関では所蔵しない貴重な資料である。

なお、これら複製版は上海図書館から許可を得て閲覧室で公開するものであるが、複写は許可されていないので、ご了解いただきたい。

この新聞の創刊にはジョン・R・ブラックがかかわったといわれる。布拉ックは横浜で活躍したジャーナリストで、『ジャパン・ガゼット』紙、『ファー・イースト』誌・『日新真事誌』を創刊し、『ヤング・ジャパン』の著者としてもよく知られている。一八七六年上海に渡り、写真をそのまま貼りつけた英字誌『ファー・イースト』の新シリーズを刊行している。『シャンハイ・マークユリー』は創刊當時、このブラックのファー・イースト社から印刷・刊行されている。

複製版は、一八七九年四月一七日の創刊号から同年一二月三一日まで（欠号あり）。

②『シャンハイ・マークユリー』
The Shanghai Mercury 一八七九年四月一七日創刊の英字夕刊紙。中国名を『文匯報』という。『シャンハイ・マークユリー』紙が夕刊から朝刊に変わったため、その跡をうめるため創刊されたという（創刊号の刊行の辞）。当初は四頁。一面はおもに広告で占められている。

この新聞の創刊にはジョン・R・ブラックがかわったといわれる。布拉ックは横浜で活躍したジャーナリストで、『ジャパン・ガゼット』紙、『クロニクル&ディレクトリ』一八七四年版、『ノース・チャイナ&ジャパン・デスク・ホン・リスト』一八七五年版、『クロニクル&ディレクトリ』一八六七年版・一八八二年版・一八九七年版をマイクロフィルムで収集した。『チャイナ・ディレクトリ』や『クロニクル&ディレクトリ』は東洋文庫所蔵分などをすでに複製版で公開しており、上海図書館分も他とあわせて順次公開していく予定である。

③『匯報』『彙報』『益報』
『匯報』は上海で中国人が発行した最初の中国語新聞で、のち『彙報』、さらに『益報』と改題した。日刊。中國各地の記事のはか日本関係記事も掲載している。

『匯報』は一八七四年六月一八日（三号）から同年八月三一日まで、『彙報』は同九月一日（一号）から一八七五年五月一八日まで、『益報』は同七月一六日（一号）から一八七五年一二月四日まで（欠号あり）。

付記
上海図書館所蔵資料ではないが、上海で日本人が発行した日本語新聞『上海』が同じく複製版で閲覧できるようになった（大正二年二月一一日創刊号から大正三年八月まで、週刊）。これは『横浜と上海』展にご協力くださつた安部政寿氏所蔵の原本から複写させていただいたものである。（伊藤久子）

資料よもやま話

明治中期の茂木商店

— 茂木泰次郎書簡から

横浜の貿易品のなかで、もつとも重要な位置をしめたものが生糸であったことは、よく知られている。横浜の経済界をない、市政に対しても大きな発言力をもつた者の多くが生糸売込商であったことも周知の事実である。

横浜の近代史の解明にとって、生糸売込商のしめる位置は大きい。しかしながら、一九五〇年代からの『横浜市史』以来の長い伝統をもってしても、生糸売込商の経営実態は、幕末～明治前期の甲州屋、吉村屋の例をのぞけば十分に説き明かされているとはいえない。それはかれらが個人商店や合名会

社などの組織をとり、株式会社などのように広く出資者に対し、その経営内容を明らかにする必要がなかった、ということが資料そのものの残り方を規定していることである。そしてそのため官序統計に経営指標が掲載されるという事も稀であった。

したがって、売込商内部からみずから経営について記した資料は貴重である。今回紹介する書簡も、売込商内部から経営の実態を報告したものひとつである。

発信者は茂木泰次郎、宛先は瀧正太郎。日付は四月七日となっている。茂木泰次郎は、明治前・中期を通じて、横浜最大の生糸売込商を誇った茂木商店に婿入りし、創業者初代茂木惣兵衛（初代保平）の没後、事実上の後継者となつた二代茂木保平である。瀧正太郎は、泰次郎の実兄であり、二人は名古屋の有力呉服商瀧定助家に生まれている。泰次郎は明治五年（一八七二）年六月二十五日に生まれ、明治二十五年（一八九二）三月、二十歳に満たない年令で茂木家に入婿している。初代惣兵衛は二七年八月に逝去し、泰次郎は家督

を相続して二代保平を名乗るので、この手紙は、明治二五年から二七年の間のものとなる。しかし内容的に判断して、入婚後一ヶ月の短期で知りえた情報とは思えない。したがつて明治二六年のいづれかのものであろうが、文竇が新鮮な驚きでみちている事から、長文にわたるが、早速本文を紹介しよう（原文は句読点がほとんどないため、適宜読点を付し、また段落をかえた）。

時下追々春氣ニ相向候處、御尊君様別ニ御障モ無之事大慶至極ニ奉存候、次ニ愚生モ不相變無事消光罷在候間憚ながら御休憩被下度候、

援 今朝書状を以て玉絲織切本廻送方上申仕候間定て行違御廻之事ニ奉存候、就わ其後追々当地風習等且ソ商売ハ一切内地取引とは相違致し居り候、当店ハ年内四百萬円以上之売上にて、口銭ハ壹分ニテ、荷主より荷物預後賣拂済迄之日歩組合規則三錢三厘、年内利益金大凡ソ七萬円前後、資本金ハ拾五萬円ニテ、尤も店内株式組職ニテ年内在荷最多七千箇位最少壹千箇位、其内ニテ金融ハ日本銀行正金銀行等ニテ生糸抵當割引手形ニテ融通致し、七拾四銀行ニテわ信用借ニテ日銀行倉庫へ生糸差入置て別ニ抵當と云ニハ非ラズ、右凡そ借用日歩ハ自今大凡ハ非ラズ、右凡そ借用日歩ハ自今大凡店内規則ハ株式ニテ主人初メ手代迄

（資金積立金合計）本年度之収金壹万五六千円ノ事、如何其驚入候、尤も賣買上貸金更ニナシ、僅カ式千円位ニテ支配人初小僧迄月給或ハ年給ニテ利益



茂木泰次郎肖像（瀧定株式会社蔵）

金ハ夫々割当順ニ積立之方法ナリ、右方法ニ付自然店員之勉強力モ増加スル様ニ至ニ候事、帳方之法ハ受附方壱人金方壱人帳合方一人ニテ一切受附ニテ受理シテ金方或ハ帳合方ニ廻スナリ（貴店ノ如キハ支配人ニテ一切事務ヲ受付銀行ノ如ク金員受取ル時ハ紙切ニ金高記入シテ貴兄金方ニテ金員ハ金方直接ニ受取ル方法ニスレバ其暁決算之時両名ノ金高引合スレバ決シテ間違等無之様ニ思ワル、当店ハ三人ニテ決算メ高引合スル事ニ付決シテ間違之事ナシ、日曜日毎ニ小生一切帳面ノ検査引合致スニ付更ニ違事ナシ、貴店ノ如キモ必ズ帳面ノ再検査厳重ニスル事、尤も帳合方一人増加シ品物賣消必ズ一人取扱セル事、簿記ハ当店を行、誠ニ不便利ニテ行不申ニ付旧來ノ併ノ界行用紙ニテ帳面一切仕仕雖、支配人ハ當店ハ荷受賣方自己一切總理ス、金錢帳面上關係セス、外ニ貸附方壱人アリ、右ハ所謂生糸十箇ヲ荷主より受ル時ハ右糸ハ一箇式百五十円或ハ三百円と金額ヲ見積リ、荷為替或ハ貸附シ為替ノ切替時ハ一々催促スル者ナリ）先ツ大略如斯商賣的ナリ、與向年内収益金ハ株券類ニテ五萬円位、地所借家等ニテ壹萬五六千円之収益（尤モ商賣利益ハ別ニシテ）七萬円前後之収益ナリ

吳服店之如キハ流通資本四万円前後（資金積立金合計）本年度之収金壹万五六千円ノ事、如何其驚入候、尤も賣買上貸金更ニナシ、僅カ式千円位ニテ支配人初小僧迄月給或ハ年給ニテ利益

店も追々貸得意減少シ一層ノ改良ヲ行
イ、三月以後ハ日歩或ハ利子ヲ取ル工
風ヲ致し商内減少シテモ右方法ニ断然
拳行被致候方宜敷と奉存候)

書簡の末尾に「御破捨置被下度候也」という配慮を願つてゐるところに「養子ノ心クルシキ」部分を感じざるをえない。実兄への書簡という氣やすさもない。実兄への書簡という氣やすさもあつてか、文脈のとりづらい部分が多いが、内容は伝わつてくる。

書簡が伝えるものの第一は、茂木商店の経営規模である。資本金一五万円で、年内売上四百万円以上、利益金七万円前後、生糸在荷は最多で七千箇である。この生糸売込商としての経営規模とともに、併設された呉服店の資本金は四万円前後。「収金」一万五、六千円である。

上申仕候、尤も右内尤も外聞を憚ル事有之ニ付宜敷御承行、決て他見者御禁置被下度候

愚生もかく相成候上ハ不都合等有之
ハ実ニ一身之不名誉、何處迄も心抱候事
致事為念ニ付宜敷御安心被下度候、実
ニ交際上皆々貴顯紳士斗之事ニ御座候
(随分養子ノ心クルシキ事ニ有之ナレ
トモ愚生ハ何處迄も心抱候事ニ乍憚安
心被下度候)

右書状ハ御仕舞置申御破捨置被下度
候也、後日残シ置ハ余リ不宜事ニ奉存
候
〔名古屋・瀧定株式会社蔵〕

第一は茂木商店の金融である。詳くは述べられないが、当時の製糸家に対する壳込商の貸出日歩（利子）は二〇〇円に対して三銭三厘である。茂木

書簡が伝える第四の事実は、茂木商店の「奥向」の収入である。株券類が五万円、不動産から一万五、六千円の収益があった。茂木家が蓄積した恒産は、生糸売込による収益に匹敵するものを持たしていたのである。

之界用行紙」を用い、簿記は不便利である、としている。また支配人は生糸の荷受・売方を「一切總理ス」と、壹込の荷権をつよく持ち、金錢帳面上は関係しなかつた。また生糸を担保に専為替によつて製糸家に資金融通する貸付方もいた。

第三には茂木商店の組織である。部門的に語られているにすぎないが、「帳簿方」すなわち經理は、受付方・金方・帳合方の三人によつて構成され、また泰次郎自身日曜日ごとに帳簿の点検を行なつてゐる。その帳簿は「日來ノ辰

機関銀行であり、當時の平均的な借出金額は日歩二銭五厘よりもさらに七厘低い有利な日歩で茂木商店は借り出していた。これが生糸代金の一パーセントである生糸売込手数料とともに、茂木商店が対製糸家金融によって得るところの利益の源泉であった。

もつてることを例に出し、名古屋でも呉服太物組合を結成して、商売上歩合金を徴収して財政基盤とし、同業者と市の利益のために尽くすことがよいだろうとしている。

龍正太郎が破り捨てるところなく、長く故郷にしまい置かれた弟泰次郎の書簡は、伝説となってしまった茂木商店の繁栄を、一世紀をへだてた今日に伝えているのである（なおお書簡の詳しい検討をふくめた初代茂木惣兵衛の事績については、横浜開港資料館編『横浜商人とその時代』有隣堂新刊、でもあつかつてている）。（平野正裕）

第一次大戦後的好況期に総合商社化したが、大正九年の恐慌の渦中で倒産。半世紀にわたる茂木の繁栄は潰えることとなつた。以後茂木・野沢屋の商号は野沢屋呉服店（百貨店）に引き継がれたが、茂木家がふたたび横浜の舞台に復活することはなかつた。

業」と称される繁榮は、泰次郎の時代に成立したものである。しかし泰次郎は大正元年（一九一二）に四十一歳の働き盛りで急逝した。その後茂木商店は息子の良太郎（三代惣兵衛）のもとで、茂木合名会社に組織がえされ、

初代茂木惣兵衛の没後、泰次郎は二代茂木保平として茂木商店の商勢の伸長に尽くした。茂木商店・野沢屋呉服店・野沢屋輸出店・野沢屋絹商店・茂木銀行・茂木土地部の「茂木の六大事業」

開 覧 室

前々号・前号と二回にわたり閲覧室の開架書架に並ぶ新聞の一部を紹介してきましたが、今回はスペースの関係で開架に出すことのできない新聞の一部を紹介します。閲覧請求でご覧になります。

『ノース・チャイナ・ヘラルド』(The North-China Herald 複製版)一八五〇年八月、ヘンリー・シアマーン(Henry Shearman)により上海で

創刊された週刊の英字新聞。一八六一年に他社から『シャンハイ・デイリー・タイムズ』(The Shanghai Daily Times)が刊行されるまでの一年間、上海唯一の英字新聞であった。一八六四年日刊の『ノース・チャイナ・ディリー・ニュース』(The North-China Daily News)も刊行され、一八六七年には両者が統合され『ノース・チャイナ・ヘラルド・アンド・マーケット・レポート』(The North-China Herald and Market Report)となった。一八七七年に『ノース・チャイナ・ヘラルド・アンド・スマート・コール・トゥン・ゴンシニア・ガゼット』(The North-China Herald and Supreme Court and Consular Gazette)へ再度改題された。本紙は一九四〇年代に停刊となるが、その高い

信頼性で、創刊以来停刊までの約一世紀の間、常に上海のジャーナリズムの中核をなした。当館では一八五〇年八月の創刊号より一九一一年二月までの複製版を公開している(一部欠有り)。

『チャイナ・メイル』(The China Mail 複製版)

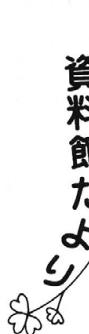
お知らせ

閲覧室の図書整理のため、左記の期間閲覧室を休室します。
平成6年6月28日(火)～7月1日(金)
平成7年2月28日(火)～3月3日(金)
平成7年3月31日(火)～4月1日(水)
また月末整理日のため次の日は閲覧室を臨時休室します。

となる『オーバーランド・チャイナ・メイル』(The Overland China Mail)も刊行された。本紙は一九〇九年に廃刊となるが、創刊以来六〇年以上にわ

なる(南区南太田町 増田好夫氏)
(3)『大阪朝日新聞』(明治26年～大正6年)ほか 五三点(鎌倉市長谷 加藤晴夫氏)
(4)『渡辺豊氏辞令』五七点(東京都世田谷区上野毛 夏目八郎氏)
(5)『松本喜美子あて三宅書簡』(昭和9年4月1日)ほか 五点(戸塚区矢部町 松本貴美子)
(6)『五味龜太郎旧蔵資料』一〇九点(金沢市富岡西 五味稔雄氏)
(7)『地理学評論 Ser. A』八五点、(8)『西日本文化』一九一点(藤沢市弥勒寺 齊藤俊彦氏)
か三点(磯子区杉田町 間辺文七氏)

資料館だよ!



▼展示

(1)「館蔵資料展—横浜の近代—PART I」記念講演会7／16(土)午後一時三〇分～四時 会場 横浜開港資料館講堂 講師及び演題 園田英弘(国際日本文化研究センター教授)「黒船来航―誤解の文明史―」井上勝生(北海道大学教授)「ベリー来航と文明の影―開国史を考え直すために―」受講料 五〇円 先着八〇名(往復葉書で申込ください)申込先 (〒231横浜市中区日本大通3) 横浜開港資料館講演会係

(2)「横浜外国人墓地」展8／3～11月初旬 山手の外国人墓地の歴史とそこに眠る人々の事績をとおし、横浜の外国人社会を紹介。

▼講演会

(2)『武士道』(井上哲次郎講話)一点
肇氏 棚ほか 九点(旭区万騎が原 宇野原肇氏)

(8)『拾海苔鑑札』(屏風浦漁業協組)ほか 三点(磯子区杉田町 間辺文七氏)

「館蔵資料展—横浜の近代—PART I」記念講演会7／16(土)午後一時三〇分～四時 会場 横浜開港資料館講堂 講師及び演題 園田英弘(国際日本文化研究センター教授)「黒船来航―誤解の文明史―」井上勝生(北海道大学教授)「ベリー来航と文明の影―開国史を考え直すために―」受講料 五〇円 先着八〇名(往復葉書で申込ください)申込先 (〒231横浜市中区日本大通3) 横浜開港資料館講演会係

(1) 絵葉書(昭和初年) 横浜三溪園藤棚ほか 九点(旭区万騎が原 宇野原肇氏)

(8)『拾海苔鑑札』(屏風浦漁業協組)ほか 三点(磯子区杉田町 間辺文七氏)

▼寄託資料

(1) 加山三郎スクラップブック 四点(神奈川区六角橋 加山昇市氏)
(2) 五味龜太郎旧蔵地図関係資料一四点(金沢市富岡西 五味稔雄氏)
(3) シイベルヘグナー商会関係古写真 アルバム一〇点(東京都千代田区丸の内 日本シイベルヘグナー株式会社)
▼ビデオ

横浜・上海友好都市提携二十周年記念「横浜と上海」二つの開港都市の近代 学校関係及び生涯教育など各種団体に貸し出します。詳細は当館まで。

▼無料入館のお知らせ

6月2日(木) 横浜開港記念日につき展示室への入館は無料となります。

たって、香港のジャーナリズムを代表する新聞であった。当館では一八四五

年二月二〇日号より一八六〇年一〇月

一日まで(一部欠有り)と、一八八

一年七月二三日号の複製版を公開して

いる。(石崎康子)